

[外国語]

英語遊びを取り入れた「にこにこスタートプラン」の有効性

－小1プロブレム解消の試み－

茂木 淳子*

1 研究の背景

(1) 小1プロブレム解消の取組

近年、「小1プロブレム」という言葉で指摘されているように、幼稚園や保育所から小学校入学への橋渡しがスムーズでないことに焦点が当てられている。授業中に教師の話を見聞かず、勝手に立ち歩き、自分の言いたいことだけを言って、教師の指示通りにできない「モンスター1年生」という言葉がある。モンスターペアレントからの派生語であるが、長年、小学校教育に携わり、1年生の指導に当たってきた筆者にとって、これは残念な言葉である。「モンスター1年生」が生じた背景には、教師の意識の持ち方や現状認識に問題があることを和田(2010)は指摘している。

小学校に入学した子どもは、過度の緊張状態にあるとともに、小学生としての新しい生活が始まることに対する喜びと大きな期待をもっている。だからこそ、和田が指摘するように、学校生活のスタートには十分な配慮が必要である。しかし、そこには環境移行による大きな段差があり(小林, 2003)、その環境の変化に小学1年生が対応することは容易なことではない(高木, 2013)。無藤(2010)は「幼児教育は楽しさを中心として活動を行い、そこで暗黙のうちに学びが生まれる。小学校で学習活動を意識して行い、そのための意図的な努力を求める。2つの学習システムの橋渡しは幼・小連携であり、それがうまくいっていない現れとして小1プロブレムがある」としている。

諸感覚を働かせ、遊びを通して総合的に学んできた子どもが、小学校に入学した途端に座学で教科の枠に収められて学習することには無理がある。小学校の指導方法に、幼児教育の環境構成や指導援助の方法を取り入れつつ、最終的には、小学校のスタイルに無理なく移行することが望ましい(渡部, 2004)。2つの学習システムの橋渡しをスムーズにする手立ての代表的なスタートプランは、生活科を中核とした合科的な指導である(文部科学省, 2008)。新村ら(2014)は、小1プロブレム軽減を目的としたリトミックの音楽プログラムの実施に効果を見出した。林(2010)は、人と人のかかわりをつくり出し、自尊感情をも育むモラルスキルトレーニングの有効性について言及している。小1プロブレム解消のための試みは1つではなく、様々なアプローチの仕方があることを先行研究は示している。鈴木(2010)は、小1プロブレムの起こりにくい授業について①「教室内での学びに馴染む工夫」②「活動(動き)があること」③「活動に楽しさがあること」の3点を挙げている。また、スタートプランの活動内容がパターン化されていることや「静的な活動」と「動的な活動」が効果的に組み合わせられていることも重要である(田邊, 2010)(景山ら, 2013)。

(2) 英語遊び

現行の学習指導要領では高学年のみに外国語活動が必修化されているため、低学年の外国語活動実施率は必修化以前に比べて下がっている(ベネッセ, 2010)。しかし、小学校の教師は小学1年生から外国語活動を開始することに肯定的である(植松ら, 2010)。早期英語教育を期待する保護者も多く(ベネッセ, 2006)、「科目としての英語」ではなく、「活動としての英語」を望んでいる(秀, 2014)。遊びの一環として英語が楽しいものだという認識をもたせたいという意向がうかがえる。

低学年における外国語活動は、モジュールなどの比較的短い時間で、諸感覚を用いたり、体を動かしたりする活動に適している(バトラー後藤, 2014)。その内容は、歌やチャンツ、ダンス、ゲーム、絵本を扱った活動など多岐にわたっている(小玉ら, 2014)。したがって、「動的な活動」として歌やダンス、「静的な活動」として絵本の読み聞かせをするなど、スタートプランで活用しやすいことが予想される。これらのことから、外国語活動(以下、「英語遊び」)

* 上越市立柿崎小学校

を取り入れたスタートプランは、前述した小1プロブレムの起こりにくい授業の3要素を満たすと考えられる。

2 研究の目的

本研究で、英語遊びを取り入れた「にこにこスタートプラン」を実施し、その効果を明らかにすることを目的とする。

3 研究の方法

- (1) 実施時期：2014年4月～2014年5月
- (2) 参加者：1年生2クラス 36名
- (3) 測定方法：ARCS動機づけモデルに基づく5段階評定尺度形式の7項目のアンケート
- (4) 分析方法：直接確率計算（母比率不等）

4 研究の内容と実際

入学翌日からの1カ月間、1年生全員がそろそろ朝の会を実施した。4月当初はまだ肌寒かったため、暖房ができ、かつ、机に縛られることのない、ある程度広い空間を活動場所として選んだ。1年担任3名が交替で指導に当たり、級外職員が子どもに寄り添った。45分という時間の枠や教科の枠にとらわれることなく、子どもの様子を見ながら「動的な活動」と「静的な活動」のバランスを大切にし、楽しく、集中できる活動になるよう心掛けた。また、毎日の活動が、子どもにとって見通しのもてるものになるよう、朝の会のメニューを表1のように固定とした。

表1 にこにこスタートプラン 朝の会のメニュー

1. あいさつ
2. 健康観察
3. 歌・ダンス（日本語、もしくは英語遊び）
4. 体を使った遊び（日本語）
5. 絵本の読み聞かせ（日本語、もしくは英語遊び）
6. 英語遊び（英語）
7. スペシャルゲスト

7番目のスペシャルゲストとは、級外職員の自己紹介のコーナーである。毎回、簡単な自己紹介と子どもを引き付ける楽しい活動を用意してもらった。簡単なゲーム、絵本の読み聞かせ、紙芝居、切り絵や縄跳びの技の紹介などである。上記のメニューのうち、3番目の歌・ダンスと5番目の絵本の読み聞かせは、その日の子どもの様子やスペシャルゲストのコーナーの内容によって「英語の歌やダンス」「英語の絵本の読み聞かせ」といった内容に変更可能とした。朝の会全体が「動的な活動」や「静的な活動」をバランスよく組み合わせた内容になるよう英語遊びの内容で調整した。

① 朝の会全体のバランスを取るための英語遊び

1番目のあいさつと2番目の健康観察は、いつも通り行った（表2）。3番目の歌・ダンスは校歌の練習であった。「静的な活動」ではないが、自由に動き回ったり、踊ったりするわけではないので「動的な活動」とも言い難い。4番目の体を使った遊びは、まねっこ遊びであった。「動的な活動」である。担任が「さあ、みなさん」と言うと、子どもが「なんですか？」と合の手を入れ、担任が「こんなこと、こんなことができますか？」と言いながらおもしろいポーズを取ると、子どももそのポーズをまねしながら「こんなこと、こんなこと、できますよ」と返す活動である。サルのもまねをしたり、片足立ちでバランスを取るポーズをしたりと担任の動きをまねしながら、楽しく過ごした。

表2 朝の会の例1

1. あいさつ	
2. 健康観察	
3. 歌・ダンス	校歌
4. 体を使った遊び	まねっこ遊び
5. 絵本	チャンツ Five Little Monkeys
6. 英語遊び	手遊び歌 Open shut them
7. スペシャルゲスト	絵本の読み聞かせ

この日のスペシャルゲストは、絵本の読み聞かせを予定していた。「静的な活動」である。そのため、それ以前の活動を動きのある楽しいものにする必要があった。そこで、5番目の絵本の活動では、チャンツのFive Little Monkeysを用いた。5匹のサルがベッドの上でジャンプして遊んでいて、1匹がベッドから落ち、頭をぶつけてしまったので、お母さんのサルがお医者さんに電話する。するとお医者さんのサルが“No more monkeys jumping on the bed!”と告げる、楽しいチャンツである。このチャンツは繰り返しが多く、幼児から小学生まで幅広く楽しめる内容になっている。子どもは、リズムに乗って体を動かしながら、サルになりきって楽しく活動した。何度か繰り返すうちに、“No more monkeys jumping on the bed!”というお医者さんのセリフを言えるようにもなった。このチャンツは子どもたちのお気に入りとなり、「また“No more monkeys jumping on the bed!”をやって！」とせがまれるほどになった。

6番目の英語遊びでは、「動的な活動」から「静的な活動」への移行がスムーズに行われるよう工夫した。チャンツで気分が高揚している子どもを落ち着かせるため、手遊び歌のOpen shut themを用いた。楽しみながら英語が身に付くTPR（全身反応教授法）である。歌詞のLay them on your lapの部分を変更し、put them on your head / mouth / nose / ears / lapなどとした。子どもは入学以前に手遊び歌をたくさん経験している。担任が英語で歌いながら動作を見せると、すぐにその動作をまねし始めた。両手を開いたり閉じたりして、頭や耳に手を当てるという動きである。最後にput them on your lapと担任が歌い、上手に体育座りになっている姿勢のよさをほめると、5番目の絵本の活動Five Little Monkeysのときの興奮は冷め、落ち着いた状態で7番目の絵本の読み聞かせへと移行できた。

② 英語遊びで学習規律の指導を

表3 Open Shut Themの歌詞

Open shut them
Open shut them
Give a little clap
Open shut them
Open shut them
Lay them on your lap

表4 朝の会の例2

1. あいさつ	
2. 健康観察	
3. 歌・ダンス	Hello Song
4. 体を使った遊び	落ちた落ちた
5. 絵本	} No, David!
6. 英語遊び	
7. スペシャルゲスト	縄跳びの技の紹介

1番目のあいさつと2番目の健康観察は、いつも通り行った(表4)。3番目の歌・ダンスはHello Songである。動きを付けながら、楽しく踊った。4番目の体を使った遊びは、「落ちた、落ちた。何が落ちた?」と子どもが言い、担任が「りんご」と言うと、子どもがりんごを両手で受け止めるポーズをするという遊びである。りんごやかみなり、岩、げんこつなど、様々なパターンがあり、担任が何を言うのかと注目しながら体を使って遊ぶ「動的な活動」となった。

この日のスペシャルゲストの内容は、自己紹介と縄跳びの技の紹介であった。子どもにとっては話を聞いたり、縄跳びの実演を見たりする「静的な活動」である。そこで、5番目の絵本と6番目の英語遊びを一緒にして、英語絵本のNo, David!を読み聞かせた。このお話は、David少年が次から次へと危なっかしいことをしたり、いたづらをしたりするという内容である。使用されている英語はそれほど難しくなく、挿絵を見るだけでその状況が把握できる。室内で野球をしたり、素っ裸で外に飛び出したりするDavid少年を見た子どもは自然と「No, David!」と発話するようになった。読み聞かせの後、「みんなの中に、David君はいないかな?」と問いかけると、子どもは、さっと背筋を伸ばし、体育座りでしっかりと前を向いた。スペシャルゲストを迎え、徐々に姿勢が崩れ始めたときにも「No, David!」と隣でささやくと、また背筋を伸ばし、しっかりと話を聞いたり、縄跳びの実演を見たりしようとしていた。

③ 元気がない朝のための英語遊び

表5 朝の会の例3

1. あいさつ	
2. 健康観察	
3. 歌・ダンス	校歌 & Head Shoulders Knees & Toes
4. 体を使った遊び	だるまさんが転んだ
5. 絵本	たまごにいちゃん
6. 英語遊び	Very Hungry Caterpillar / Peek a Moo
7. スペシャルゲスト	リズム体操

1 番目のあいさつと 2 番目の健康観察は、いつも通り行った (表 5)。この日の子どもは、いつもの元気がないように見えた。そこで、校歌を歌った後、Head Shoulders Knees & Toesを取り入れた。音楽が聞こえるとある子が「これ知ってる!」と言い、表情がぱっと明るくなった。特別な編曲で、しつこいくらいに何度も繰り返し、徐々にスピードアップしてくるものを使ったので、「まだあるの?」「まだ続ける?」と、へとへとになりながらも笑顔が絶えなかった。朝の会のスタートでは元気がないように見えた 1 年生も、Head Shoulders Knees & Toesが終わるころには、いつもの元気を取り戻していた。

この日のゲストはリズム体操で「動的な活動」であったため、その前の活動を「静的な活動」とした。5 番目の絵本の活動は、「たまごにいちゃん」というシリーズ化されている、子どもが大好きな話である。これが好評で、絵本をもっと読んでほしいという要望があったため、6 番目の英語遊びでも英語絵本の Very Hungry Caterpillarを取り入れた。この絵本は日本語に翻訳もされており有名である。英語での原文は、難しい表現も含まれており、挿絵や読み手の声色や動作だけでは表現しきれない部分もある。しかし、「はらぺこあおむし」の内容を知っている子どもがほとんどであったため、推測不可能な英語が多少含まれていても苦にすることなく、絵本を楽しむ様子が見られた。もう一冊用意した絵本は、Peek a Mooという仕掛け絵本である。日本語でいう「いないいないばあ」に相当する。いろいろな動物が顔を隠して登場する。読み手がその動物の鳴き声を英語で言う。meow

(ニャーオ) / baa (メェー) / ribbit ribbit (ケロケロ) / cock-a-doodle-doo (コケコッコ) などである。隠れている動物が何か分かった子どもは競って手を挙げた。一種のなぞなぞのような感覚で活動を楽しんだのだろう。子どもが挙手し、担任が指名し、指名された子どもが立ち上がって答えるというパターンを繰り返した。ピンク色の肌にとがった耳をした動物を見せ、「oink oink」と鳴き声のまねをすると「ブタ」という答えが返ってくる。仕掛け絵本の動物の手の部分をめくるとブタの顔が出てくる (図 1)。それを見せながら担任が英語で“Pig”と言うと、子どももおうむ返しに“Pig”と言う。子どもにとっては英語のなぞなぞだったが、担任にとっては、発言のルールを指導するよい機会となった。

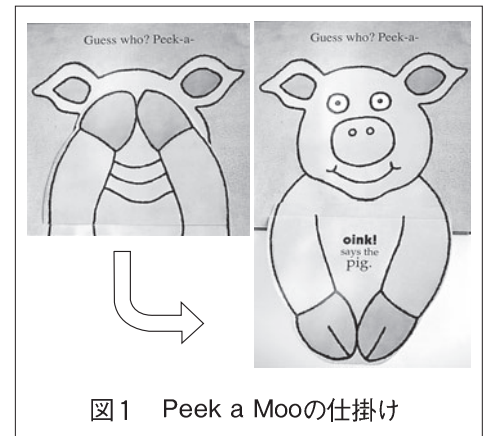


図 1 Peek a Mooの仕掛け

Marie T. C. "Peek a Moo"
Dutton Children's Books, 1998

5 結果

(1) 子どもから見たにこにこスタートプラン

にこにこスタートプラン終了後に、ARCS動機づけモデルに基づくアンケートを実施した。表 6 に示す各項目の平均は、4.56から4.81の範囲にあり、好意的な反応が得られたと考えられる。これらの回答を「5: はい」「4: 少しはい」の肯定的回答と「3: どちらでもない」「2: 少しいいえ」「1: いいえ」の中立・否定的回答に分けた。この回答を 2 対 3 の母比率不等で直接確率計算を行った結果、7 項目すべてにおいてその偶然確率は $p=0.00$ (片側検定) であり、有意水準 1% で有意であった。したがって、子どもは英語遊びを取り入れたにこにこスタートプランを「わくわくし、おもしろく、やりがいがある、チャレンジする価値があり、自信がついて、満足でき、もっとやりたい」活動であったととらえていたと考えられる。

表 6 ARCS動機づけモデルによる 7 項目の平均 (M) と標準偏差 (SD) と分析結果 (N=36)

項目内容	M	SD	肯定	中立・否定的	p	比較
わくわく	4.81	0.58	35	1	**	肯定>中立・否定的
おもしろい	4.78	0.76	35	1	**	肯定>中立・否定的
やりがい	4.75	0.50	36	0	**	肯定>中立・否定的
チャレンジ	4.69	0.79	35	1	**	肯定>中立・否定的
自信	4.56	0.84	35	1	**	肯定>中立・否定的
満足	4.81	0.52	36	0	**	肯定>中立・否定的
もっと	4.78	0.76	35	1	**	肯定>中立・否定的

** $p<.01$

(2) 指導者から見たにこにこスタートプラン

本研究で扱った英語遊びは、表7のように分類することができる。

表7 英語遊びの内容の分類

「動的な活動」	中間的な活動	「静的な活動」
TPRを活用した歌やダンス チャンツ	手遊び歌 動きを伴った絵本の読み聞かせ	英語絵本の読み聞かせ

子どもの状態は、一様ではない。少し元気付けたい、もう少し落ち着かせたい、思いっきり楽しませたいなど、その時々の子どもの様子を見ながら英語遊びの何をどのように扱うかを選択した。表7に示すように、英語遊びの効果は多岐にわたる。「動的な活動」で活発にしたいときには、Head Shoulders Knees & ToesなどのTPRを活用した歌やダンス、チャンツが効果的だった。動作があったり、おうむ返しに発話したりする活動は、幼児にも適している（久埜，1997）。繰り返しが多く、親しみやすい曲を選ぶことで、動きをまねしたり、簡単な英語を口ずさんだりする姿が見られた。「静的な活動」では、英語絵本を活用した。Very Hungry Caterpillarのように話の内容を知っている絵本や、My Pet, Dear Zoo, Brown Bearなど、見るだけで内容が理解できる絵本を選んだ。

また、中間的な活動も存在することが分かった。「動的な活動」から「静的な活動」に移行する際、子どもを座らせてからOpen shut themやFinger familyなどの手遊び歌をすることでカームダウンの効果があり、「静的な活動」への移行がスムーズになった。Peek a Mooで何の動物なのかを当てたり、City By Numbersで絵の中に隠された数字を見付けたりする活動では、クイズ形式で進めることにより、子どもが挙手して、指名された子どもだけが答えるという発言のルールを定着させる機会となった。

6 考察

本研究による活動は、楽しいだけでなく、「動的な活動」や「静的な活動」をバランスよく組み合わせることでメリハリが生まれ、小学1年生にとって魅力的なものであった。低学年における外国語活動では、「英語で進む空間にいて、困らなかった、次も困らないだろう」という自信をつけることが大切だと言われている（久埜，2008）。本研究では、いずれの活動においても、「英語が分からない」と活動に馴染めない、英語遊びに消極的な子どもは見られなかった。むしろ、意味の分からない英語を絵や写真、教師の表情や動作、前後の文脈などをヒントに理解しようとすることで、集中して話を聞くという学習規律を身に付けさせることもできた。以上のことから、英語遊びを取り入れた「にこにこスタートプラン」は、幼児教育と小学校教育の2つの学習システムの橋渡しをスムーズにするスタートカリキュラムであったと考えられる。

小学校に入学したばかりの子どもは、勉強に対するあこがれをもっている。教科書を開くことも、ノートに文字を書くことも、宿題をもらって家で勉強することですらあこがれの対象なのである。1年担任は、子どものその気持ちを大切にすべきであろう。その一方で、入学当初はトイレやロッカーの使い方、廊下の歩き方など教科学習より先に身に付けさせなければならないことがたくさんある。教師の指導したいことだけを指導していると、1年生の「すぐに勉強したい」という願いはかなえられない。私の学級の子どもは「今日は何のお勉強をしてきたの?」という保護者の問いに「英語のお勉強したよ」と得意気に答え、覚えたての英単語を披露したそうである。子どもも担任も、保護者も「にこにこ」になる英語遊びを取り入れたにこにこスタートプランの効果を実感している。

7 今後の課題

「にこにこスタートプラン」を入学当初だけのものとせず、長期にわたるカリキュラムを開発し、その効果を明らかにすることが今後の課題である。

引用・参考文献

- 植松茂男・上原明子・衣笠知子・高橋美由紀・粕谷恭子・北村尚紀・佐藤玲子・柳 善和 「習熟度・開始学年・時間数の関係」『小学校英語教育学会学会誌』12, 2010年, pp.138~146
- 景山陽子・馬場信明・小林倫代 「特別支援学校における幼稚園への支援」『国立特別支援教育総合研究所ジャーナ

- ル』第2号, 2013年, pp.26~32
- 久埜百合 『こども英語相談室』ピアソン・エデュケーション, 1997年
- 久埜百合 『子どもと共に歩む英語教育』ぽーぐなん, 2008年
- 小玉容子・キッド ダスティン 「短期大学における幼児・児童向け英語教育の実践」『島根県立短期大学部松江キャンパス研究紀要』Vol.52, 2014年, pp.187~194
- 小林小夜子 「就学前集団保育から小学校への移行における適応に関する発達心理学的研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要』52, 2003年, pp.65~71
- 鈴木邦明 「小1プロブレムが起これにくい授業方法の工夫」『国立青少年教育振興機構研究紀要』10, 2010年, pp.119~126
- 高木友子 「小1プロブレム対策を考える」『湘北紀要』34, 2013年, pp.41~50
- 田邊道行 「入学初期の子どもが学校生活に適應するための学校体制の工夫」『教育実践研究』20, 2010年, pp.307~312
- 新村元植・中村礼香 「鹿児島市における幼児期から児童期移行の音楽プログラムの取り組みⅡ」『南九州地域科学研究所所報』30, 2014年, pp.43~53
- バトラー後藤裕子 「児童の発達段階に応じて学びはどのように変化するか」『英語教育』Vol.63, No.5, 2014年, pp.18~19
- 林 泰成 「モラルスキルトレーニングで小1プロブレム・中1ギャップを防ぐ」『悠+』27(3), 2010年, pp.80~83
- 秀真一郎 「幼児教育現場における英語活動」『吉備国際大学研究紀要』第24号, 2014年, pp.43~51
- ベネッセ 『第1回小学校英語に関する基本調査(保護者調査)』2006年
- ベネッセ 『第2回小学校英語に関する基本調査(教員調査)』2010年
- 無藤 隆 「小1プロブレムに対応する教師の指導力と組織体制」『教職研修』38(6), 2010年, pp.100~103
- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 生活編』東洋館出版社, 2008年
- 渡部容子 「幼・小接続教育の課題」『鳥取短期大学研究紀要』50, 2004年, pp.63~71
- 和田 成 「小1プロブレムは、まだ解決できないのですか?」『教育ジャーナル』48(12), 2010年, pp.8~18